月刊 名大文学部

第 101 号

発行：名古屋大学文学部
広報体制委員会
koho@hum.nagoya-u.ac.jp

教員コラム―No.99

天皇「代替わり」をめぐって

河西 秀哉（日本史学）

2019 年 4 月 30 日に平成の天皇は退位し，翌 5 月 1 日に新天皇が即位しました。天皇が死去を伴わずに交代するのは，近現代では初めての出来事です。歴史を知っていると，かつて院政という状況があったことを思い浮かべ，天皇が退位するのは当たり前ではないかとも考えてしまいます。ところが，明治以降，天皇は辞めないと決められました。それが今回変わったのですから，私たちは今，歴史が転換する場面を目の当たりにしたことになります。

私は前回の天皇の交代を，小学生の時に見ました。昭和天皇は倒れ，長く病床にありました。その間，日本社会には「自粛」という雰囲気がただよいます。天皇が病気なのに，私たちが楽しいことをしていては不謹慎だ，様々な行事をやめよう，そうした動きが高まるのです。ちなみに，その年の秋，中日ドラゴンズは優勝しますが，やはりお祝い行事は自粛されました。しかし，なぜ天皇だけがそのような特別扱いを受けるのでしょうか？その理由は示されなかったので，私はとても不思議に思いました。

昭和天皇の死去後，テレビは，昭和という時代，そして昭和天皇を回顧する番組一色となりました。しかし，当時，私の家の近くにあったレンタルビデオ店は人でいっぱいとなり，ほとんど貸し出しという状態でした。これまで自粛と言っていたのに，なぜテレビを見て天皇に思いを致さないのだろうか？それも私には不思議でした。

今回の天皇交代は，それとは異なるようです。令和という元号の発表まで，新元号の予想合戦が繰り広げられました，発表当日も，多くの人々がテレビやネットでその状況を確認し，新聞の号外を奪い合うような状況もありました。そうしたお祭りムードになるのはなぜか。私は，平成の象徴天皇制のあゆみと関係しているのはないかと考えているのですが，果たしてどうでしょうか。

（写真は「令和」の典拠の「梅花の宴」が催された大伴旅人邸跡とされる坂本八幡宮　福岡県太宰府市）

分野・専門紹介―File42

あらゆる視点でインドと自分自身を見つめる（インド文化学セミナー）

分野・専門名：インド哲学

隔週で木曜日に，ちょっと疲れるけれど，どっぷりとインドの世界に浸れる，インド文化学セミナーという授業があります。いわゆる「ゼミ」と言っていいのでしょうか，学生の発表を中心に据えた授業であり，2 名の先生と，学部 3 年生から大学院生まで，研究室のすべての学生が参加します。徹底的に議論ができるよう，4 限と 5 限を連結した，3 時間の長い

授業になっています。

年度または学期の始めに，学生はいつ発表するかを割り振られます。テーマは卒論に関係しているものが多いですが，まったく関係なくても，興味があればなんでもありです。自分で文献を読み，関連情報を調べ，資料を作って発表します。先輩や先生から問題点を指摘してもらったり，知らない情報を教えてもらったりして，研究をブラッシュアップするのが目的ですが，セミナーでの議論はそれに留まりません。発表によって浮上した問題について，全員でさまざまに検討し，答えを探していくこともあります。

セミナーは発表者だけのためにあるのではありません。参加者全員が，そこから新しいことを学びます。インドの思想・文化の領域は，ほんとうに広大で，とてもひとりでは学びきれません。哲学，文学，宗教，神話，法学，医術，祭祀，占星術‥‥‥自分の知らない領域についての他の学生の発表を聞いて，自分の中のインドが，さらに大きく拡がっていきます。普段の講義や文献講読の授業でも多種多様な領域を扱いますが，それでもカバーできない分野には，セミナーが導いてくれます。

セミナーは，また，全学生が集まる大切な交流の時間にもなっています。先生はセミナーのあと「打ち上げ」に行きたがっているようですので，たまには相手をしてみましょう。　　（岩﨑　陽一・准教授）

分野・専門紹介―File43

「学芸員はがん」？

学芸員養成課程：博物館学

博物館や美術館で働く専門職員のことを「学芸員」といいます。ユネスコにおいて博物館の主要機能が「保存」「調査」「コミュニケーション」「教育」とされているように，学芸員の仕事は多岐にわたります。各館の収集方針にしたがい，ふさわしい資料や作品を収集して適切に保管するとともに，来館者に向けて効果的な展示と様々な教育活動を行います。併せて各種の調査研究活動に携わるとともに，館外から作品を借用して特別展を企画したりもします。国宝や重要文化財，世界的な名画の展示に立ち会えるのは学芸員ならではの役得です。少し前に「学芸員はがん」などという政治家の心ない発言がありましたが，学芸員の存在があってこそ文化財の保存と活用のバランスが図られてきたことを忘れてはなりません。

学芸員として採用されるには，まずは歴史学，考古学，美術史学等，各専門分野におけるひとかどの知識と研究能力を養うことが必要です。同時に，学芸員養成課程で博物館法に定められた所定の単位を修得する必要があります。具体的には，生涯学習概論や博物館概論に加え，経営論，資料論，資料保存論，展示論，教育論，情報・メディア論といった講義科目によって現場の実務を正しく理解し，加えて博物館実習で基礎的なスキルの一端を身につけていただきます。

学芸員資格は，教職免許と並び，文学部での学びがもっとも仕事に直結する資格ということができます。実際，名大の先輩方もこの地域の博物館や美術館で多数活躍されています。皆さんも名大文学部で人文学を究め，学芸員として社会で羽ばたいてみませんか。　（栗田　秀法・教授・元愛知県美術館主任学芸員）

最近の文学部

ついに令和元年

コラム執筆者の河西先生は『近代天皇制から象徴天皇制へ―「象徴」への道程』（吉田書店）などの御著書があります。自分の国について多角的な視野から深く学ぶことができるのも，名大文学部の魅力です。（YK）

＊本紙では，名大文学部の多彩な内容を順に紹介していきますが，それまで待てない人は…
名大文学部の WEB サイト　https://www.hum.nagoya-u.ac.jp/　まで（『月刊名大文学部』のバックナンバーもあります）